



老人ホームで入居者に法話をする出島元寿さん＝金沢市橋場町

臨床宗教師 北陸でも活動

患者らの悩み聞き、寄り添う

6年前の東日本大震災をきっかけに誕生した心のケアに携わる「臨床宗教師」。理解はまだ進んでいないが、北陸でも活動している人たちがいる。医師とは異なる立場で不安を抱えた患者らを支える。

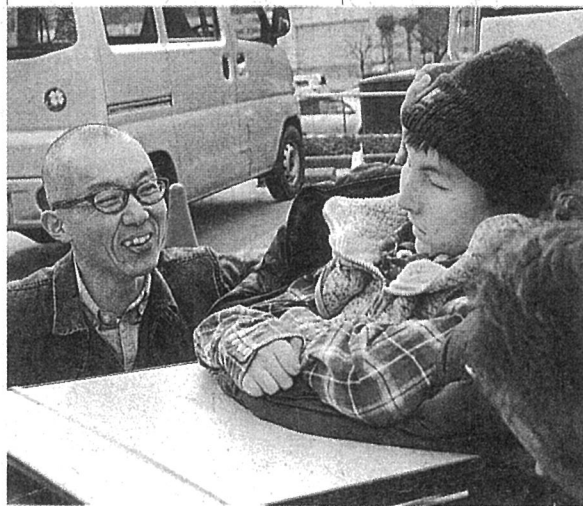
今年4日、金沢市内の介護付き有料老人ホームで入居者を前に法話をする僧侶の姿があった。臨床宗教師で妙法寺副住職の出島元寿さん(36)だ。東京で保育士をしていたが、2011年春に東日本大震災の被災地で海に向かってお経を唱える僧侶の姿をテレビで見たのがきっかけで保育士を辞め、臨床宗教師を養成する東北大学の講座を受講した。いまは金沢の老人ホームで月に1回法話をするほか、がん患者や家族が悩みを分かち合う施設「元ちゃんハウス」に足を運び、患者の話を耳を傾けている。

「理解不足」悩みも

だが、「成果が目に見えにくい心のケアは理解されづらい

東日本大震災 契機に誕生

在宅医療の利用者に笑顔で話しかける臨床宗教師の木下克俊さん(左)＝福井市真栗町



い。「お坊さん」が病院や老人ホームに足を踏み入れることへの抵抗感を肌で感じてきた。理想の姿は病院に常駐して自然に患者の話を聞ける宗教者。米国で病院や軍隊など生死に関わる職場にいる公的な資格を持つ「チャプレン」をイメージする。だが臨床宗教師としての雇用の場は見つかっておらず、本業の合間を縫ってボランティアで活動が続いている。

リハビリ前向きに

一方、福井市で在宅医療を専門とするオレンジホームケアクリニックでは僧侶で臨床宗教師の木下克俊さん(43)が職員の一員として携わっている。10年前に脳挫傷で車いすを使うようになった男性とは週1回、一緒に風呂に行く。

職を得たのは1割

日本臨床宗教師会の事務局

長を務める東北大学の谷山洋三准教授(45)＝臨床死生学Ⅱによると、臨床宗教師の養成講座を修了した約220人のうち、臨床宗教師で「職」を得ているのは20人程度。だが、谷山准教授は「何を『宗教』というのか。心のケアよりも布教するというイメージが強いなかで、『1割』は奇跡的な数字」とみる。

家族に話しかけたりするよう

(新屋絵理)